短編保管庫

テステス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
短編保管庫

【Ｎコード】
Ｎ６９９９Ｖ

【作者名】
テステス

【あらすじ】
ラブコメ、萌えの練習作品。キャラ崩壊注意？

一刀×愛紗

蜀州都、成都。そこにある城の一室で政務をする男がいる。椅子の背もたれに体重を預け、体をほぐすように伸びをする。

「ん～！　今日は特別量が多いなー。もしかして詠が嫌がらせのつもりでこっちに書簡を回してきてるのかな？」

眼の前の書簡の山という現実から逃げるように詠に恨み節を吐くその男、北郷一刀である。平々凡々なその見かけとは異なり、実態は蜀の王であり、天から降りた世界の救い手、天の御使いなどと呼ばれる人物である。

天の御使いと言われていても実際はただの一青年。いまでこそ世界を超えた非日常を生きているが、その能力は一般成人男性のそれと大差ない。その人物が一国の王になり、政務を為す。愚痴をこぼすには十分なストレスであると言えた。

「何を馬鹿なことを言っておられるのです。無駄口を叩いても書簡は減ったりしませんよ」

その愚痴を一刀両断するのは美髪公関羽。

いくら一刀が分不相応だ、力不足だ、と駄々をこねてももはや遅い。彼はすでに王となり責任のある立場。それを放棄し逃げ出すなど言語道断である。

とはいえ、愛紗も今日の書簡の量は尋常ではないことは知っていた。この量の書簡を今日中にまとめろ、など弱音を吐くのも無理は無いように思えた。そしてだからこそ、愛紗は一刀の執務室にいた。

「わかってるさ、ただの冗談だよ。……この書簡一つ一つが民のた

めになるんだからね。いくら量が多くたって負けてらんないよ」

そう言って一刀は政務に戻る。愛紗はそのときの顔がたまらなく好きだった。

一刀の普段は優しげな目を鋭く精悍にするその様は、勇敢な武人に通じるものがあると愛紗は感じていた。

「その意気です。非番の私が補佐するのですから、出来ませんでした、なんて許しませんよ」

愛紗はその胸に抱いた感情を表に出さぬように顔に力を入れる。緩んだ顔を見せることは乙女として恥じらいがあるからだ。

そのせいで怖い顔になってしまい、一人になって後悔するのは別の話である。

「はいはい、今日も今日とて北郷一刀は愛紗にいびられるのでしたとさ、ってね」

「ご主人様！」

ははっ、と笑う一刀を見て愛紗は保護欲にも似た思いを抱く。

（まったく、ちょっと勇ましくて格好いいかと思ったら、今度は子どもみたいに無邪気な顔をして……。）

様々な顔を見せる一刀を愛紗は愛おしく思うが、一刀の言葉に少々疑問を抱く。

（……私はそんなふうに思われているのだろうか……）

鈴々がよく言うアイシャゴン、巷でよく聞く嫉妬神に代表される自身の二つ名。どれも好意的なものにはとても思えない。
一刀も先ほどの言葉から察するに、あまり自身のことをよく思ってないのであろうか。
思い返せば自身は他の者に強く当たりすぎていたかもしれない。
（だが仕方が無いのだ。私が諌めていなければ桃香様はすぐにぽわぽわとするし、鈴々は隙あらば仕事を放っぽいて遊びに行ってしまうんだ。私がしっかりしてないと……）

そういえば最近星によく言われることがある。何が眉間に皺が寄っているだ。貴様らが私をおちょくるからではないか。好きで皺を寄せてるわけではないわ。
星の不敵で挑発的な顔を思い出すと、ついムカムカとしてしまう愛紗。その眉間にはしっかりと皺が寄っている。

はあ、と小さくため息をつく愛紗。こういうところが二つ名の所以なのだなと納得してしまう。

（こんな私だ。ご主人様が私を……す、好きに思っていられるなんてこと、ないだろうな……）

私は胸が張り裂けそうになるくらい好きなのに。
一刀の顔を見ていたときの幸福感はどこへ行ったのか、愛紗は落ち込んだ。

（ご主人様はずるいです……。私をこんなにしておいて自分は知らないふうにして……。私の女の部分は溢れ出してしまっているというのに……）

一刀にこうした感情を持つ前までは、自分は武人として生き、女としては死んだものと思っていた。それが一刀と言葉を交わすたびにきつく閉じ込めた女の部分が少しずつ、自分が意識しない内に温められほぐれていってしまった。

『女』など武人には必要のない惰弱な感情であると思っていたのに、今となってはその女の部分が力をくれる。

ご主人様とまた会えるように。また話せるように。また触れられるように。

そう思うと偃月刀を持つ手に力が入る。万の軍勢に一人立ち向かえる勇気が持てる。

（……そのはずなのに……。私はご主人様にどう思われているのか、聞く勇気もない……）

愛紗はポーッと政務をする一刀を眺める。

自身を虜にする優しげにも勇ましくもなる澄んだ目、一本筋の通った鼻、笑うと白い歯がよく見える口。

愛紗は一刀の全てが愛おしかった。

（……やはり私たちの世界と天界とでは顔の造形も違うのだな。こんな魅力的なら私など相手にされるわけもないか……）

（……でも）

一刀の顔を眺めるのをやめられない。

（……やっぱり、ご主人様は格好良いなぁ……）

ポッと顔を赤らめる愛紗。胸を高鳴らすのを止めることなど出来るわけがなかった。

（ふふっ、ちょっと前までは字も書けなかったのに今はスラスラと政務をこなしていられる。あのときはご主人様もこの世界に来たばかりで初々しいものであったな。歳相応の緩んだお顔で、可愛らしかったことを覚えている。それがここまで成長して……）

（幼い顔も良いが、やっぱり今の凛々しいお顔が私は好きだな。そのお顔の澄んだ目に取り込まれてしまいそうだ。とてつもなく透明度の高い水のように私をはっきりと映し出していて、身も心も共にあるのだと思える。ああ、そうだ。今もこうしてご主人様の目に私が……）

「えっ？」

一刀の目に愛紗が映り込んでいる、ということはすなわち一刀が愛紗を見ているということである。愛紗はポーッと一刀を眺めているのに気を取られ、一刀がこちらを見ていることに気付いていなかったのだった。

「どうしたんだ、愛紗？　じーっとこっちを見て」

一刀が問う。それも当然だ。愛紗は自身の表情を隠すために顔に力を入れていて、傍から見れば怒っているように見えた。その怒っているような愛紗に凝視される一刀が何事かと聞くのはまさしく正しかった。

「えっ！？　何でもないですよっ！　何でも！」

「いや、何でもないならどうして睨むのよ？　俺ちゃんと政務やってるよ？」

「睨っ！？　睨んでなんてませんよ！　ただっ！……」

「ただ？」

その先は答えられない。その勇気がない。ご主人様のお顔を見ているなど、そんなことを言ってしまったら羞恥で死んでしまいそうだ。

それきり黙ってしまう二人。空気は重く沈み込んでいた。

（ううっ、こんなつもりではなかったのに……。ただお顔を見ていただけなのに……ご主人様もひどいです。睨むだなんて……）

愛紗はどういう意図であろうと睨むような真似をしたこちらが悪いのだとわかっていたが、自身の思いに気付かぬ一刀に対しての恨みがあって、素直に謝ることも出来ず黙り込んだ。

一刀は一刀でなぜ愛紗が怒っているのかも分からない。ただ質問しただけである。ただ理解したのは自分がなにか怒らせるようなことをしてしまったのであろうということである。

一刀は今日の自分の言動を思い返す。何か愛紗を怒らせるようなことをしてしまっただろうかと原因を探すためだ。

そして、一つ心当たりを見つける。

「もしかして、『いびられる』って言ったのに怒ってる？」

見当はずれである。愛紗は肩を落とさずにはいられない。

一刀はその愛紗の様子に気付かぬまま話を続ける。

「俺は別に愛紗が怒りんぼとか言いたいわけじゃなくてね？　ただ

のちょっとした冗談というか……」

頭をかく一刀の話を遮って愛紗が言う。

「そうじゃありません。というより私は怒ってません」

「……とてもそう見えないんだけど」

「怒ってません」

また黙ってしまう二人。

「……どうやらご主人様は私がそばにいると政務に集中できないようで。私はもう自室に戻ります」

そう言って扉に向かって歩き出す愛紗。一刀は愛紗の肩を掴んで歩みを止めようとする。

「ちょっと待ってよ。話は終わってないって」

「聞きたくありません」

「じゃあそこにいるだけでいいよ。愛紗と一緒にいたいんだ」

「……」

そう言われては愛紗も足を止めるしかない。

どうして私の心を震わせることを言うのだろうか、この愛しきご主人様は。

（……いや、この人はそういう人なのだ。言葉巧みに弄ぶのだ。鬼畜だ。変態だ）

自身の期待を打ち消すように否定を繰り返す。その結果、自身の主を罵っているのだが意図しているわけではない。

若干顔を赤くした愛紗に気がつくわけもなく、一刀は足を止めてくれた愛紗にほっとする。

「さっきの話だけどね。ごめん、ちょっと訂正させて。愛紗はやっぱり怒りんぼだよね」

ピクンと愛紗の肩が脈打つ。それは、勝手にした期待が裏切られたと思って。

一刀は愛紗の不安に思う感情は敏感に感じ取り、背中から包むようにして抱きしめる。

「でも、そこが愛紗の可愛いところだよ。ごめんね、俺は愛紗にかまってほしいから、ついついいじめちゃうんだよ」

耳元で甘美なことを言う。愛紗は裏切られたと思ったどん底の失望から天にも昇る心地を味わっていた。

「俺が情けなく弱音を吐いて、それを愛紗が『そんな事じゃ駄目です』って道を正してくれて。俺がふらふら女の人に目を奪われて、それを愛紗がジト目で見て……」

「そうやって俺を常に見てくれてるのがすごい嬉しいんだよね。だから、確かめたくなっちゃんだよ。今日も俺を見てくれてるのかって」

別にMってわけじゃないんだけどね、と一刀。愛紗は”えむ”がなにを指しているのか分からないがそんなことはどうでもいいことだ。

「……私があなたを見ていないときなんて、あるはずがないでしょうに」

「うん、分かってる。でも何度でも知りたいんだ。愛紗は、俺の大切な人だからね」

その言葉に、愛紗は今までで最大に体を震わせた。

（ああっ、ご主人様は本当にひどい。どうしてこうも私を喜ばせることに長けているのか。今一番言ってほしいことを言ってくれるのか）

その震えは歓喜の震え。自身を疎ましく思ってはいないかと不安に思っていた心を、いともたやすく解きほぐしてくれる。

こうなってしまえばやることは一つだ。一刀が自身を大切に思っていることは分かった。ならば、あとは自身の気持ちを届けて受け止めてもらうだけだ。

愛紗はバッと振り返り、思いを告げようと一刀の顔を見た。

いつも以上に凛々しいお顔。もはや後光が差しているようにすら見える。

「あっ、ううっ、あぅ……。〜〜〜〜〜〜っ！！」

恋愛経験値の低い愛紗にはとても告白など無理な芸当であった。

（なんなのだ、この御方は！　天の御使いだからって光輝く必要はないではないか！　私の心を乱してなにが面白いのだ！）

いわれなきことを言われる一刀である。

「愛紗……？」

「ひっ！」

もはや幽霊に出会ったのかのような反応をする愛紗。その例の反応と少し違うのは頬が朱に染まっていることか。

その愛紗が不審そうに思い近づいた一刀の顔のアップを見せつけられて耐えられるわけがなかった。

「しっ、失礼しましたっ！！」

若干上ずった声で部屋をあとにするしか道は残ってはいなかった。

（これは戦略的撤退だ！　断じて怖気付いたわけではない！　断じてだ！）

一刀の執務室から猛ダッシュで自室へと駈け込む。

自室でようやく一人になれた愛紗はベッドに飛び込み、枕を顔に押し当てる。このようなニヤニヤと緩んだ顔を万が一にでも見られないようにだ。

（……大切な人、か……。と、ということは私は希望を持っていいんだろうか……。ご主人様も私のことを……）

「……ふふっ、ふふふふっ」

（……笑いが抑えられんっ！）

胸の高鳴りを抑えることをすっかり放棄し、その高鳴りのまま体をジタバタさせる。この幸福を体全体で表現する。

「ふふはははっ！　我が意を得たり！　堅牢な城壁は崩れ、兵は流れ込んでいる！　あとは城主に槍を突きつけるだけ！　そう、槍を……」

そうテンション青天井な愛紗が言ったところで詰まってしまう。槍を突きつける。すなわち気持ちを告げる。そのようなことを私が出来るのかと。

あのとき逃げ出してしまった私がそのような勇気を持てるのかと。

愛紗は想像する。

目を焼くほどの後光に、一刀の神々しい御姿を。

「……無理だっ！」

早々と諦める愛紗。その間０．１秒である。

「……天は何故私に辛く当たるのか……。槍を突きつける将が日和ってしまうとは……。なんと情けないことか……、だが」

「……道は、拓けたな」

自身の気持ちは重々承知。一刀の気持ちも悪くはないとはっきりした。

これより先は一心不乱に突き進むだけ。

敵は後光などという奇々怪々な代物だけだ。奴を打ちのめしてし

まえば邪魔する輩はいない。
行動あるのみだ。
なるべく一刀のそばについて後光に慣れてしまおう。そのついで、と言っては何だが、一刀の好感度を上げる策を講じよう。
丁度日も落ちてきて、まさに今に相応しい策がある。料理を作ろう。男は胃袋を抑えてしまえばこっちのものであると紫苑も言っていた。経験豊富な紫苑が言うのだ、間違いはないはずだ。

目標が見えてからの愛紗の行動は早かった。
調理室に赴き、ろくにしたこともない料理を四苦八苦する愛紗は他の将から快いアドバイスを貰いながら、一つのチャーハンを完成させた。
メンマあり酒あり、一刀が好きだと言っていた魚の刺身あり、精が付くようにとすっぽんやヤモリも入れた特別料理である。当然味見などしていない。したくない。それは嫌悪感からではなく、全て一刀のものであるという意識からである。迷惑である。

そのチャーハンを落とさぬよう両手でしっかりと持って一刀の部屋へと向かう。その足取りは軽い。
遠くで異臭騒ぎなどでやかましいが、愛紗はまったく意に介していなかった。
意識は全て一刀に向かっていた。
美味しいと言ってくれるだろうか。
そう言われるのを想像して悶えるのを堪える愛紗。輝かしい未来に向かって夢ごこちである。

もちろんそれを食べた一刀は倒れた。米粒一つ残さずにしてから。

超合金Z！　行け、ロボ華雄！（前書き）

本命の連載放置で何をやっているのか。一人称練習ということで、ジェバンニが一晩でやってくれました。

超合金Z！　行け、ロボ華雄！

記憶が定かではない。
私は確かに張飛に斬り棄てられたはずだ。陽光に照らされ燦然と輝く丈八蛇矛に一閃、袈裟斬りされ自身の知りたくもなかった血の味を確かめた。それだけはよく憶えている。忘れられるわけがないのだ。私を倒した人物の顔を目に焼き付けずに死するなど、武人として到底許容出来るものでないのだ。
そうだ。私はあのとき死んだはずだ。この身を虎牢関に埋めたはずなのだ。
ならば、なぜ私はこうして虎牢関の前で立っている？
なぜ私の体は鋼鉄となったのだ？

◆◇――超合金Z！　行け、ロボ華雄！――◆◇

とりあえずこの体のままこの場に留まることは得策ではない。誰かに見られて尋問でもされたら面倒だ。どこか身を隠せる場所を見つけなければ……。
そう思って、周りを見渡す。
先程から真っ暗闇なのは自身の目が狂ったわけではなく、今が夜中であるということであったようだ。厚い雲が月も星も隠してしまって、手を伸ばした先も見えない。
くそ、これじゃ何も見えないな。なんとかならないものか……。
そう雲に向かって愚痴ると、私の体は自然に動いた。いや、果たしてそれは自然といっていいのか、むしろあまりにも不自然であった。私の意識とは別に動いたような気がするのだ。

く　ぱ　ぁ　ッ　！！

口を限界まで開き、雲に向かってそれを放った。まるで電撃のような一筋の閃光。辺りはまるで昼にでもなったかのように煌々と照らされ、その閃光は一直線に雲を貫き散り散りにさせてしまった。

「……はあああぁあああぁぁぁぁっ！！？」

いやいやいやいやいや、おかしいおかしいぞ。

たしかに私は「雲が邪魔だなあ」とは思ったが、こんな人外な手段をもって光を求めたわけではないぞ。

自身に起きた超常現象に混乱の極みだった私だが、今のこの状況が最悪なのは分かった。

虎牢関から、今の光は何だと騒然としている様子がわかる。いや、この距離から会話が聞き取れるのもおかしいのだが。

だが幸いなのは先の閃光によって遠くに森があることが分かった。今はもう月も出ているので道を誤ることもないだろう。

私はとりあえず閃光に感謝しつつ、森へと走った。

そのときは気付いていなかった。

私の目、”暗視もーど”にできたのだなあ。

◆◇◆◇◆◇◆◇

森をひた走り、ひらけた泉まで来て私は腰を落とした。

息を落ち着ける必要もなく体は絶好調といったところで休む必要

などなかったが、走っている途中で気付いたのだ。胸に一枚紙が挟まっていた。
私はその差出人不明の紙を広げ、そこに書かれていた文字を熟読する。
何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も。
うんざりするほど読む。

『死にかけとったんで突貫工事……もとい治療しといたわ。
うちには感謝せんでもええからな。
ウチのとある馬好きの新参武将に頼まれてやったことやからな。
いろいろその体に文句もあるやろうけど堪忍な。それ以外に助かる方法なかったんやから。
まあ、その体の取扱説明書も付属しておくから、それよく読んどき！
ほな、また……。ああ～、こういうときなんて言うんやったかな？
たしか、そう！　える・ぷさい・こんがりぃ！　……ちゃうかな……。

狂気の発明家より』

その紙と取扱説明書とやらをこの頭に叩きこむことも容易に終わり、ごろりと仰向けに転がる。
顔にファサァ……と紙を乗せ、息でふわりふわりと浮かせる。
そうしてしばらく遊んで、今度こそ自分の意志でもって放つ。

く　ぱ　ぁ　ッ　！！

ジュッと焼失する紙にまだ足りぬと、”華雄いれいざーがん”を放つ。
周りの木々がとばっちりを食うがそんなことは知ったことでない。

「な～にが治療だ！　魔改造もいいとこだ、これは！　絶対に許さんぞ、絶対にだ！　狂気の発明家！？　える・ぷさい・こんがりぃ！？　まるで厨二病全開じゃないか！」

私は助けてほしいなどと言ったことはないぞ！

武人としての死を無碍にしおって！　到底容認できぬ！　この発明家とやらと馬好きの武将め！

「発明家も！　馬好きも！　私が叩っ斬る！」

華雄いれいざーがんで周囲を焼き野原にして、咆哮する。咆哮せずにはいられないのだ。武人として誇りある死が私の望みだったのだ。それに違わぬ舞台を用意してくれた張飛すら馬鹿にされているような、まるで死命のような義務感が生まれていた。

「これが開戦の狼煙だ！」

天に向かって華雄いれいざーがんを立ち昇らせる。

上れ昇れ、私の怒り。震える心の臓が燃え尽きるほどの熱を示す私の華雄いれいざーがん。

私はここに第二の産声をあげたのだ。

そんなことをやっているから、また虎牢関の兵から逃げる羽目になった。

私の安息の地はどこだ！

◆◇◆◇◆◇◆◇

はあ……。
森を抜けてから、もう何日荒野を彷徨っただろうか。いや、この私の高性能電子頭脳が計算すれば十三日と二十一時間五十六分とすぐに分かるのだが、この鬱々とした感情がそれをさせなかった。
どうせ睡眠も疲労もないのだ。寿命もないらしい。のんびり行こう。
寿命もないといったが、実際は少し違う。
私は私の心の臓の代わりである核融合炉なるものを利用して動いているらしい。それが動き続ける限り、死ぬことはないそうだがどうでもいいことだ。私は憎き敵を討ったあとは大人しく死ぬつもりだからだ。
まあ、それまでは生きていなければならないので粛々と核融合炉を動かすため、用意された食事を食う。その食事も本当は必要ないらしいが、暇つぶしのためにも食っている。力も付くらしいしな。

ガリガリ。ギシギシ。ガジガジ。

そんな音を立てて食事する者は私くらいなものだろう。もしかしたら別の世界線では緑の服を着た男もしているかもしれない。
この世界では私だけ、とそんな無駄な謙遜をして食べる。味などない。味付けするつもりもない。こんなものは人間が食べるものではないのだから、味付けしても無駄な努力というものだ。
こんな――鉄クズなんて。

いや、鉄クズといったがなかなか種類豊富だ。まったく余計な気遣いだ。
鉄に金、銀、銅、炭に白金……。ただの石ころや粘土まである。
ぜーんぶ同じ味だ。用意した奴は馬鹿だ。

というか私に味覚はあるのだろうか……。

はあ……。

溜息をつくと薄っすら口から華雄いれいざーがんが出てくる。薄っすらなので何の威力もないがなんとなく嫌なものだ。それを見る度自身が人をやめてしまったことを見せつけられる。

そんなことを考えていると目の先に人が見えた。

ようやく人と話せる。幸い見た目は首から下の上半身を除いて変わっていなかったので外套を使えば機械の体とバレることはないだろう。……上半身だけならなぜ高性能電子頭脳を……。なにかしら事情があったのだろうか……。しくしく。

「おい、そこの！」

さめざめと泣いているとさきに見つけた人が話しかけてきた。格好から察するにただの農民といったところか。少々様子が違うのは大荷物を持っていることだ。

「こっちは賊がいてあぶねーど！　引き返したほうがええど！」

「賊だと？　そんな輩私が叩き斬ってくれるわ！　どこにいる、その馬鹿は」

やけである。

この体になって敵などいなくなったことは分かっていた。呂奉先ですら脅威に感じない。

もう何も恐くない。

「一人じゃ無理だっぺ！　奴ら二百はいるで！　勝てっこねえっぺ！」

◆◇◆◇◆◇◆◇

くぱぁッ！！

「勝ったな」

「ああ」

◆◇◆◇◆◇◆◇

私は今、成都に向かっている。

賊共を倒す報酬として情報をもらった。食料も金も別に必要でなかったので情報が最も大事なものだったのだ。そうはいっても無理やり押し付けられたが……。いらんと言っておろうに。

なぜ成都なのかというと、そこに張飛がいるからだ。

張飛ともう一度決闘を、という事ではない。張飛以外知り合いがいなかったのだ。

董卓様たちの行方もしれず、発明家も馬好きの行方も分からず、途方に暮れる私は誰かに頼らなければいつまでたっても敵を見つけることはできないと悟った。

この大陸の情報を収集できる有力者。そう考えて思い浮かんだのが張飛だ。

自身の交友関係の狭さが憎い。なにが楽しくて自身を斬った相手に泣きつくというのだ。自然と涙が出るわ。それの何が悪い。ちくしょう。

そうして成都に着いたのだが、街人から聞くに張飛はいないらしい。それどころか劉備も関羽も、主要な人物は出払っているとのこ

と。
なんでも大きな戦があるらしく赤壁に向かっているとか。
魏に対抗するため蜀呉同盟となって戦うらしい。そのこと自体は驚くことはなかった。魏は強い。あの張遼は曹操と共に居るという話だ。董卓様から曹操に主を変えるなど余程曹操に感じるものがあったということだ。その曹操に相対するには同盟もやむを得ないといったところだろう。
こうなってしまっては魏はお終いだろう。なぜなら私を破った孫策と張飛の二人がいるのだ。負けるわけもない。
……しかし、それでは張遼が死んでしまうのではなかろうか？
あまり好ましいことではない。仮にも同じ軍に所属して同じ釜の飯を食った仲だ。出来ることなら生きてもう一度会いたい。
それに張遼は神速と言われた騎馬の名手だ。奴なら私をおせっかいにも助けた馬好きとやらを知っているかもしれん。
やはり是が非でも生きてもらわねばならない。
別にこうして一人になって張遼の馴れ馴れしい態度が恋しくなったなどということはない。？水関や虎牢関で私を諌めていたことが私に生きて欲しいという張遼の不器用な表現手法であったのだろうなどと思ったわけでは決して無い。それに今更ながら気付いて張遼に邪な感情を抱いたわけでは断じてないのだ。絶対にだ。

◆◇◆◇◆◇◆◇

やってきました新野城。籠城の構えを見せる曹魏に蜀呉が攻め立てる。
これでは陥落は時間の問題かと思い、華雄いれいざーがんを蜀呉に放ってやろうかとくぱぁしたところで、私の”鷹の目”が発動した。

遠方の荒野に見える土煙。私はそれを凝視する。
「戦闘兵数六万……十万……、バカな！　まだ上がるだと！？」
次々に更新される数字。最初に計測してから二分三十八秒経過したところで結果が出た。
兵数三千万。うん、三千万。さんぜんまん。
五胡が総力をあげて攻めてきたのだ。
この途方も無い数。魏呉蜀全ての兵数を足しても八十万に届かないといったところで、それが驚異的であることが分かるだろう。
このままでは五胡に蹂躙されることは確実であろう。
孫策も張飛も、そして張遼も。
ただ殺されるのだあれば、まだ救いというものだ。だが彼女らは私とは違って見目麗しい魅力的な女性なのだ。その彼女らが死などというもので済むはずがない。……ハアハア。
「……私はこのときのために今まで生きてきたのかもしれないな……」
そう思ってしまえばこの体にした敵もそれでも悪い者でもないのだと感じる。
私には三千万を打ち倒す力を、愛する者を守る力をくれたのだから。
だが心残りなのは最期に張遼に会えなかったことか。
それでも。
「彼女を傷つけることは！　有象無象の区別なく！　私の金剛爆斧は許しはしない！」
発明家から渡された最期の食料。金のかけらを口に含みゆっくり

嚥下した。

「完成！　『金剛爆斧　らいとせーばー　えでぃしょん』！」

我が右腕を光り輝く巨大な戦斧と変え、三千万の兵に一人特攻する。

誰も来るんじゃない。これから先は化物の一方的な虐殺。人の入ってきていい領域ではない。

誰も、誰も私を見るんじゃない。

◆◇◆◇◆◇◆◇

血の河に一人立つ。

くそ、無理をしすぎた。もとより覚悟の上だったとはいえ二度目の死というものは辛いものだ。

”えねるぎー”がもう無い。核融合炉の鼓動が小さくなっている。食料も尽きこのまま終わりを待つ。

……まあいい。五胡は殲滅させたんだ。武人として文句のつけようがない大戦だった。それ以上に守りたい人を守れた。これ以上の幸せはない。

もう目が見えない。

張遼め、私がこうして戦ったのにねぎらいにも来ないのか。薄情な奴だ。奴の血の色は何色だ。私は茶色の油だ。あ、血すら通ってなかった。

もういい。寝てしまおう。この私が黄泉路に逝けるか分からないが、そこで張遼を待つのも悪くない。そのときに言うんだ。恥ずかしくても、勇気を出して。

「わ、私は、お前のことが――」

おわり。

元ネタ

ベルセルクとかＥＡＴ－ＭＡＮとかまどか☆マギカとかヘルシング

とかシュタインズゲートとかエヴァとか。

超合金Ｚ！　行け、ロボ華雄！（後書き）

復讐っぽいノリどこ行ったんだよ！（ＣＶ．ちゃんみお）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6999v/

短編保管庫

2011年10月9日08時11分発行